

第28回

栄光へ、連打! 連打!

# ファイティング原田

fighting harada

63.7%と60.4%。

この2つ、なんの数字がおわかりだろうか。

テレビの視聴率だ。

紅白歌合戦(1963年=81.4%)や、1964年の東京オリンピックで“東洋の魔女”と畏れられた全日本女子バレーボールチームがソ連を相手に金メダルを獲得した決勝戦での驚異的な視聴率(66.8%)と並び、第5位と第8位にランクされるこの2つの数字。実は1人の男がたたき出したものだ。

そのヒーローとは、プロボクサーのファイティング原田さん。

1965年11月30日、世界バンタム級タイトルマッチ、対アラン・ラドキン戦が60.4%。

1966年5月31日、世界バンタム級タイトルマッチ、対エデル・ジョフレ戦が63.7%。

いったい何がそれほどまでに人々を魅了し熱狂させたのか。

当のファイティング原田さんにボクシングを始めたきっかけ、厳しいトレーニングと節制の日々、対戦した選手たちの思い出、今の日本ボクシング界、後進選手たちへのアドバイスなどについて伺った。

聞き手/山本浩 文/山本尚子 構成・写真/フォート・キシモト

## 今でも毎朝ロードワーク

—— 現在71歳ということですが、肌の色つやがいいですね。

いい汗をかいているからじゃないですか、毎日毎日。

—— 今でもトレーニングを?

ええ。毎朝、ロードワークをしています。今は走るというより歩いていますけどね。

—— 御実家は、植木屋さんだったそうですね。

親父がやりました。僕は小さい時分、植木屋になろうと思っていたんです。だから、よく親父の仕事についていきましたよ。ほら、僕の顔、眉間に傷があるでしょう。これ、父が枝をナタで切っている最中に僕が不注意で突っ込んでいってできた傷なんです。

—— え、ボクシングの傷じゃないんですか?

全然違います。親父は庭師でもあり、植木の売り買いとかけっこう手広くやっていました。僕も、植木いじりは好きです。



植木職人だった父(左上)  
兄弟達と(前列中央が  
ファイティング原田)

## チームスポーツより 個人のスポーツ

—— 植木屋さんということは、お父さまは高いところが得意だったかと思いますが、原田さんもそうですか?

大好きだったね。

—— 駆けっこは速かった?

速くはないです。遅くもなかった。1着はあんまりなくて、3着とか2着とか。

—— 持久力のあるマラソントイプですか？

マラソンは好きで、先頭についてはいくんだけども、1等は取れない。目指す気持ちはあったんだけど、「1等のやつに負けたくない」という気持ちを持ち続けるのがよかったんじゃないですかね。

—— 子どものころはどんなスポーツをされていたのですか？

野球をやっていました。センターで1番で頑張っていましたよ。でも僕が頑張っても、チームは負けちゃうだもん。僕ね、中学のときから近所の精米店で働いていたんですよ。「チームでやるスポーツはつまんねえな」と思ったころ、お米の配達をしながら、近所に「笹崎ボクシングジム」があるのを知って、「あっ、これだ」ということで入りました。中学2年くらいかな。

—— 自分で全責任を負う代わりに、努力次第で何とかなる個人のスポーツをということですね。

親父にずっと言われていたんですよ。「男として生まれたからには、勉強して学者になるか、銭をつかむか、努力して栄光をつかむか、そのどれかを選べ」って。学校は好きだったけど勉強は大っ嫌いでしたから。



米俵を担いで身体が鍛えられた

## 世界チャンピオンの大志を抱いて入門

—— 勉強嫌いなのに学校好きというのはなかなか珍しいですね。すると学校が終わると、精米店で働いて、そのあとジムでトレーニングという毎日だったのですか。月会費を払っていたのですか？

そうですね。入会金1000円に毎月500円。

—— ボクシングについて親御さんは？

黙っていましたもん。新人王になったころにバレました。

—— お米屋さんではどんな仕事を？

御用聞きとか、配達をしていました。

—— ああ、米1俵が4斗でしょう。1斗が約15kg

だから、60kgですか。それがいい体幹トレーニングになっていたのでしょうか？

そうですね。

—— 笹崎ジムといえば、「拳聖」と呼ばれたピストン堀口の好敵手、「槍の笹崎」の異名を持つ強豪ボクサー・笹崎たけしさんが創設されたジムですよね。どんな夢を持って入られたのですか？

もちろん「チャンピオンになるんだ」という気持ちでした。日本チャンピオン、東洋チャンピオンの先にある世界チャンピオンを目指していました。

## 毎日、地味なトレーニングを積み重ねる

—— ボクシングのトレーニングって、どんなふうにするのですか？

昔も今も何も変わりありません。準備体操をして、縄跳びをして、シャドーボクシング、サンドバッグ。慣れてくるとそのあとスパリングが入ってきます。チャンピオンになってもその流れは同じです。これを毎日ひたすら繰り返すので、人によっては飽きてしまうんですよね。

—— これだけやって時間はどれくらいですか？

ひととおりやって2時間くらいですかね。それを朝と晩に。

—— ああ、2回練習。そうすると、ほかの時間は何をされているんですか？



ロードワークが日課

朝と晩にランニングをして、それ以外は休養を取ってひたすら寝ていました。

—— 笹崎ジムは猛練習で有名だったそうですね。僕はボクシングと練習が好きだから。

—— あとは食事を取るくらいですか。ランニングはどのくらい走るのですか?

朝6時ごろに起きて、太陽が上がってくると汗をかくでしょう。朝、20kmくらいロードワークをして体を絞って、ジムに戻るとオヤジ(笹崎会長)が待っていて、小さなサウナに入ってという。

## プロテストに合格しデビュー、合宿生となり新人王

—— 入門して2年ほど経った1960年2月、4回TKO勝ち(フライ級=当時は約50.8kg以下)でデビュー戦を飾りました。そしてそのあと5連勝の快進撃。

はい、そのころに笹崎会長から「合宿生にならないか」と誘われて、精米店を辞め、ジムの2階で暮らすようになりました。

—— 合宿生というのは、選手を合宿所で生活させながら鍛える内弟子制度のようなものですかね。どの弟子もみんな合宿生になるのですか?

いや、3人くらいでしたかね。

—— 原田さんは、練習態度は真面目なほうだったのですか?

僕は真面目ですよ。それだけのことをやってきたから、ここまで来られたんだと感じます。それと合宿って道場みたいなものでしょう。スケジュールが



1960年 東日本新人王トーナメントを勝ち抜くファイティング原田(左から2人目)

組まれているので、そういう意味では自分だけでやるのとは違いますね。

—— 覚悟も違いますよね。

## ファイティング原田の誕生

—— その年の秋に、東日本

新人王戦に出演。準決勝で同門の斎藤清作選手と対戦することになりました。斎藤選手といってもおわかりにならないと思いますが、のちにコメディアンとして活躍した「たこ八郎」さんなんですね。はい。

—— 笹崎会長の判断とも言われていますが、斎藤選手が棄権というかたちで異例の同門対決は回避され、原田さんは決勝で海老原博幸選手と対戦。「史上最高の新人王戦」の呼び声高い戦いで、判定勝ちをおさめました。

その1カ月後、西日本の新人王と戦って新人王を獲得しました。

—— ではこのころに、親御さんにボクサーとしての活動を知られてしまったということですね。

本名の原田政彦で出ていましたからね。近所の人たちにも知られちゃうし。

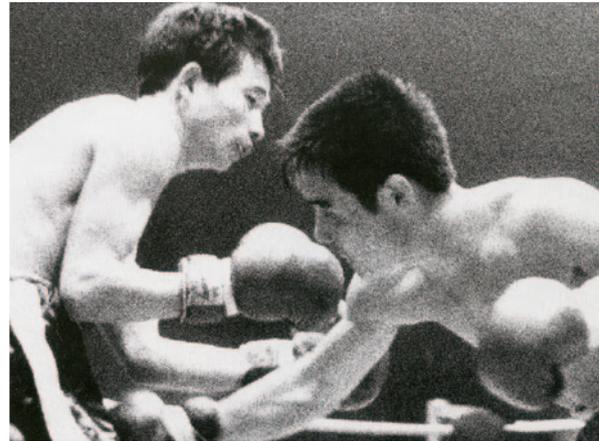
—— ファイティング原田というリングネームはいつごろからですか?

新人王を取ったあとです。オヤジに生意気を言って「名前を変えさせてください」と頼んだんだ。そうして激しいボクシングを表す名前として会長がつけてくれたんですけど、はじめは日系2世と間違えられたりして英語で話しかけてくる人もいたな。

## トイレの水でいいから飲みたい

—— ボクサーの食べ物はどんな感じですか?

道場(合宿所)に入ってから米粒は食べたことがない。現役の10年間、満腹感を味わうことはほとんどなかった。試合が終わった1日、2日だけですよ。



1960年 東日本新人王決勝で海老原博幸と対戦しライバルを下す



水対策はボクサーの使命

——では野菜中心ですか？

朝はパンが1枚に卵と野菜と牛乳ね。夜は肉でした。

——ステーキですか？

そう、ステーキ。でも試合が近くなると、肉を蒸してその肉汁だけを飲む。塩味しかしませんけど、「いやあ旨いな、これで頑張れる」なんてね。いま思えばよくそんなもので満足できたと思うくらい。今の若い人たちは、食えない時代を知らないからね。そこで自分に勝てないやつはやっぱりダメだな。

——水も制限されるんでしょう。

今は変わってきているでしょうけど、朝と晩に目方を量るでしょう。「ちょっと多いね。おまえは水を飲むな」と命じられますから。

ジム中の水道の元栓を閉められるんですよ。蛇口は針金で固定されて、ひねっても水が出てこない。うがいをしていてそのつもりはなくても水が体内に入っちゃうでしょう。すると100g、200g重くなるんです。

——ボクサーはふだんから絞っているから汗も出ないでしょう。

汗なんかかかないですよ。だから便所に行ったときに、トイレの水でいいから飲みたいって気持ちになるんです。このあたりのエピソードは、漫画「あしたのジョー」(ちばてつや)で取り上げられたはずですよ。

## 日本で2人目の 世界チャンピオン誕生

——初めて迎えた世界タイトル戦は、1962年10月10日。世界フライ級チャンピオンのボーン・キングピッチ(タイ)戦でしたね。

本当は矢尾板貞雄さんが対戦するはずだったのに、6月24日、東洋フライ級のタイトルを防衛したまさにその日に、突然引退してしまいました。

——矢尾板選手の代役として、当時日本フライ

級2位の原田さんにチャンスが巡ってきたわけですね。

そう。世界ランクには10位にやっと入るか入らなかったのころなんだけど。

僕は1つかちんと来たことがあってね。挑戦者だから羽田空港へキングピッチを迎えに行ったんですよ。握手しようと手を差し出すと、握手しながらそっぽを向いて別の人としゃべっているんだよね。調印式のときもそう。握手はするけど目を合わせない。その態度に「何くそ、絶対勝ってやる!」と奮い立ちました。

——キングピッチは原田さんのファイトに火をつけてしまったんですね。その結果、15ラウンド制の試合の第11ラウンド、原田さんがラッシュしてKO勝ち。下馬評を覆して、日本では白井義勇さんに続いて2人目の世界チャンピオンが誕生しました。翌朝は一般紙もみんな1面だったんですよ。全部取ってありますよ。

## アウェイでの リターンマッチで王座陥落

——原田さんは、前もって相手選手のことを研究したりすることは？

いや、トレーナーや会長は前もって見ておくと映像をくれるんですけど、見ちゃうと相手のいいところばかりが見える気がして。だから見ない。相手のことなんて、ゴングが鳴った瞬間にすぐわかりますよ。

——さて、チャンピオンの喜びに浸る間もなく、翌1963年1月12日、タイのバンコクでキングピッチとのリターンマッチがありました。

いやあ、あれは酷い目に遭いました。会場がぎゅ



1962年  
19歳で世界チャンピオンとなった  
ボーン・キングピッチ戦  
ロープに追い詰める



1963年 ボーン・キングピッチとのリターンマッチ戦に敗れ、バンタム級に転向

うぎゅう詰めで、控え室からリングまでのわずか50mほどの距離に行くのに、足は蹴られるわ、もみくちゃで30分もかかったんですよ。相手は板か何かに乗せられてすーっと入ってくるのよね。拳げ句、試合では第8ラウンドだったかダウンまであとちょっとのところまで攻めて追い詰めたとき、早めに終了のゴングが鳴っちゃうしさ。でたらめだよ、あんなの。

—— 壮絶なアウェイ戦で15ラウンドを優勢に戦い抜いたと思われましたが、判定で敗れたんですね。  
あんなところで勝ったら殺されていたらうね。

## フライ級からバンタム級へ

—— 今度は、フライ級からバンタム級(当時の階級では約53.5kg)へ階級を上げました。原田さんはどちらかという也太りやすいタイプだったのですか。体重は時間をかけて落としていくのでしょうか。

どのくらいで落とせるかは感覚でわかっていましたから、仮に1kg落とす必要があるとして2~3週間かけて700~800g落とすようにします。

—— 最後の100~200gがきついのでしょうか。  
ふだんから落とし切っているんだもん。あとは変な話、全部毛を剃ったりね。前日だとガムをかんでつばを吐く。それで体の水分を出すだけでもずいぶん違うんです。でも僕らはつばがもう出ないくらいだから、ガムをかんでもひっついてしまうんです。

—— もとから絞っていますからね。  
今の選手は階級が増えて、もう絞らなくていい。僕



ジムでは語り草となっているハードワークを連日こなした

らのころは8階級だったのが今は17階級もあるんですよ。

—— フライ級とバンタム級の差は2.7kgですか? 1階級上がると大分楽になるのですか?

いや、相変わらず苦しいですよ。試合が終わったときだけ満腹にできるでしょう。食べて目方が増えて練習に入らざるを得ないでしょう。だから次の試合までの合間は、背広は常にサイズ違いで2つ持っていましたよ。

—— ふだんの体重はどれくらいあったのですか? 65kgは超えていたでしょう。5~6kg落とすのは簡単なだけだね。



エデル・ジョフレをロープに追い詰めるファイティング原田

## バンタム級タイトルマッチで エデル・ジョフレに 奇跡の勝利

—— バンタム級に転向して8か月、1963年9月26日、ノンタイトルの10回戦でジョー・メデル(メキシコ)と戦いました。

負けたんですけど、あの人は人柄はよかった。

—— 翌1964年10月29日、東洋チャンピオンの青木勝利選手と事実上の世界バンタム級へのタイトル戦を懸けての戦いとなりました。3回KO勝ちで、原田さんが世界再挑戦への道を開いた。

僕には海老原、青木といったライバルがいたから頑張れたんです。2人に比べると僕なんてパンチ力があるわけでもないし、どん尻ですよ。でも自分自身に勝とうと思って一生懸命やったからさ。

—— 翌1965年5月18日、エデル・ジョフレ(ブラジル)との日本(名古屋)でのタイトルマッチ。下馬評は圧倒的に不利でしたね。

僕が負けたメダルを2回も倒している相手だったからね。ずっと無敗で防衛戦でも8回全部KO勝ちだったかな。でもね、同じ人間が戦うんだもん。同じ目方の相手に負けるわけにはいかないと考えた。

—— 彼は「黄金のバンタム(ガロ・デ・オーロ)」と呼ばれたほどの選手ですが、何が違ったのですか？パンチの強さでしょうね。

—— 僅差で2-1の判定勝ちをおさめました。その瞬間、ジョフレは原田さんを抱きかかえて祝福したそうですね。

本当にすごい男だと思いましたよ。試合中は「こんちくしょう」と打ち続けて倒すつもりだったけれど、終わればお互いに「本当にご苦労さん」という思いだけでした。僕はジョフレを破ったことで、世界の人たちに認められ憶えてもらえたんだと思います。

—— 試合の翌日、名古屋の障害児の施設を訪ねて、ミニグローブなどを贈られたとか。そのときの写真を拝見すると、にこやかで柔らかい表情で、戦い直後の顔には見えなくて驚きました。

## バンタム級チャンピオンとして 4度の防衛に成功

—— フライ級に続いて2度目の世界チャンピオンになった原田さんは、バンタム級では4回タイトルを防衛しました。1人目が、翌1965年11月30日、アラン・ラドキン(イギリス)。15ラウンドの末、判定で破って初防衛に成功。この試合で、テレビ視聴率60.4%を記録しています。

チャンピオンになって、今まで以上に自分を厳しく律するようになったという感じですか？



1965年 挑戦者アラン・ラドキンを退け初防衛

まあ、周りの人も気を使うというか、オヤジは電話を取り次いでくれないわけ。友達から電話がかかってきてもストップされて。遊びの誘いがあったても自分自身に勝たなきゃ駄目なんだもん。

—— そんな中、1966年5月31日、2度目の防衛戦は原田さんがタイトルをもぎ取ったエデル・ジョフレとの再戦でした。しかしこのリターンマッチも15回判定で下して原田さんは2度目の防衛に成功。この試合の視聴率がまた60%超えの63.7%でしたよ。3人に2人が見た。原田さんは間違いなく国民的英雄だったのですね。

当時は全然意識しなかったけどね。ジョフレは尊敬すべき偉大なボクサーであり、ジェントルマンでした。「こんな人間、こんなチャンピオンになりたい」と思うほど。だからこそ辞めたあとも親交があったんです。のちに、彼から地元ブラジルでエキシビション試合をやりとうという話があったね。検討してみても結局断ったんだけど。

—— そうでしたか。3度目の防衛戦は、1967年1月3日、バンタム級に転向したばかりの3年半前にKO負けをしたジョー・メデルとの再戦となりましたが、判定勝ち。

4度目は、同年7月4日、ベルナルド・カラバロ(コロンビア)に勝利しました。

## 前人未踏の3階級制覇は ならず現役引退

—— 1968年2月27日、5度目の防衛戦でライ



新チャンピオン誕生の瞬間

オネル・ローズ(オーストラリア)に判定負けしたあと、今度はフェザー級(当時の階級で約57.2kg以下)への転向を決めました。

2階級制覇だけでも大変なことだと思うんですけど、階級を上げるとパンチの強さはスケールが違う感じでしょう。

だから僕はフェザー級までが限度でしたね。

—— 前人未踏の3階級制覇の期待がかかった原田さんは、1969年7月28日、フェザー級王者のジョニー・ファメション(オーストラリア)に挑戦。しかし敵地シドニーだったこともあり、タイトル奪取はなりませんでした。

あんなの全然負けてねえもん。

—— ファメションがダウンを奪われると、レフェリーはカウントも取らずに助け起こしたりね。

攻勢をかけると早くゴングが鳴っちゃうしね。あっちの観客ですら、レフェリーとファメションにブーイングしていましたよ。

—— 1970年1月6日、ファメションに再挑戦するもKO負け。この試合を最後に原田さんは26歳で引退されました。原田さんの戦いぶりはいつも真っ直ぐで駆け引きなしで、正々堂々としたものでした。それが結局、ファイティング原田というボクサーが愛され続けた1つの理由かもしれませんね。ご自身、ボクサー生活は10年と決めていたということですが……。

そうです。潔く負けたんだから潔く悔いなく辞めて、若いやつに代を譲りたいと。



1970年 一度敗れたジョニー・ファメションとの再戦でも敗れこれがラストファイトとなった

## 引退して人間らしい生活ができるようになった

—— ボクシング生活で勝って覚えたことと負けて覚えたこと、どちらが多かったですか?

負けたら悔しいということです。本当の敗戦といえるのは2回だけかな。1度目のジョー・メダルには完全に倒された。あとは最後のファメション戦。

—— ファイティング原田を、10年間世界のトップに引張り続けたものは何だったのでしょうか。

ファンかな。「よかったよ、ありがとう!」なんて言ってくれて。僕は辞めて初めてこんなにファンが多かったということを知ったんです。現役のときってあんまり外に出ないじゃないですか。でも現役時代にそれを知らなくてよかった。知っていたら、ここまで来られなかったなと思ったよ。

—— お辞めになるときの将来設計は、どのように考えておられたのですか?

もう何でもやろうと思っていましたよ、人間の生活を。辞めてからやっと人間らしい生活ができるようになった。酒、たばこ、女、全部ダメだった。今でも酒も飲まないしタバコも吸わないけど、女房と結婚して子どもはできた。

—— 自分に厳しい選手だったのですね。

## きちんと挨拶ができる子どもに

—— ファイティング原田ボクシングジム(当初はトーアファイティングジム)で指導者として活動を始めて、戦う立場から教える側になって何か変わりましたか?

変わったというより、僕はやっぱりボクシングしかできないから、子どもたちには勉強ばかりじゃなくて「おはよう」「こんにちは」といった挨拶がきちんとできるように指導しています。

—— 指導者としてのモットーは何でしょう。

ボクシングは、ストレート、アッパー、フック、この3種類で右と左の組み合わせしかないんだ。技術的には、その人の得意なスタイルを活かしてやりたいということです。あとはそれを連打にする感じ



1970年 引退式で挨拶するファイティング原田 10カウントのゴングに送られリングを去った



夫人、二人の息子と



ジムの会長として  
第2の人生をスタート  
左はフェザー級のタッド岡本

ね。いいパンチが当たったあとも貪欲にKOをねらっていくとか。今のKOは昔に比べて早いよね。

—— そうですね、起き上がれなくなるまでじゃないですもんね。選手時代と違った喜びというのは何かありますか？

いや難しい。見ていて歯がゆい。

## 日本ボクシング協会 会長として21年

—— 1989年に第10代日本プロボクシング協会会長に就任されました。組織の分裂や対立もあつたりしたのでしょうかけれども、2010年まで長期政権で頑張つてこられた。

3年×7期で21年間です。

—— そして現在は終身名誉会長ですね。その21年間のボクシング界の流れをどう見ていらっしゃるんですか？

今よりは難しくありませんよ。今は組織が多くなっているじゃないですか。昔はWBA (World Boxing Association=世界ボクシング協会)とWBC (World Boxing Council=世界ボクシング評議会)の2つだった。だからまあまあ良かったと思えますよ。けっこう盛り上がりも良かったでしょう？ それが今はIBF (International Boxing Federation=国際ボクシング連盟)にWBO (World Boxing Organization=世界ボクシング機構)の4団体だもん。会長も4人。難しいでしょうね。



協会長としての最初の仕事はチャンピオン委員会の設立  
歴代チャンピオンと

## マイク・タイソンが 尊敬するボクサー

—— 殿堂関係ですと、原田さんは日本人ボクサーとして初めてアメリカの世界ボクシング殿堂入りを果たしました。国際ボクシング名誉の殿堂博物館にも選ばれています。

アメリカの有名なスポーツ雑誌『スポーツ・イラストレイテッド誌』では、原田さんのラッシュを「狂った風車」と表現したとか。

打って、連打・連打というスタイルでしたからね。



ヘビー級王者のマイク・タイソンと握手

—— 世界のボクシング界がファイティング原田を認めた要因はどこにあったと、ご自身ではご覧になっていますか？世界チャンピオンというと、モハメド・アリ、ジョージ・フォアマンといった重いクラスのボクサーにばかり目が行きがちだったでしょう。それが原田さんによって軽いクラスのボクシングの魅力に目を向けさせたという意味

があるのかなと思います。

うん、そう。軽量級といえば日本とかメキシコでしたもんね。

—— なんでも、あのマイク・タイソンが原田さんのことを尊敬するボクサーであると言っているそうですね。

らしいですね。以前、彼が来日したときに僕はホテルまで会いに行ったの。エレベーターを降りると用心棒みたいな若いやつらが何人もいたんだよ。



モハメド・アリ(左)、シュガー・レイ・レナード(右から2人目)等と  
左から2人目がファイティング原田

「タイソンさんに会わせてくれ」と頼むと「駄目だ」と言うの。やつら、僕のことを知らないからね。だから「『ファイティング原田が来た』と伝えてくれ」と言ったら通してくれてさ。

—— どんな話をされたのですか?

お互い言葉が通じないから会話にならなかったけど、ジョフレとの試合のビデオなどを見たことがあるらしくて、それで僕のファンになったんだって。

## もっと走り込め

—— 2020年には東京に再びオリンピックがやってきます。どんな期待がありますか?

1964年の東京オリンピックの前か後かわからないけど、僕は田谷幸吉選手(東京大会男子マラソン銅メダリスト)と一緒に走ったことがあるんですよ。下田でキャンプをしていたときだったと思う。僕ら、マラソン選手並みにトレーニングで走っていたんだよ。20kmは走っていた。だからスタミナがつくよね。

今の選手はね、あんまり走らない。「今、どれくらい走っているの?」と尋ねるでしょう。せいぜい5kmとか7kmとか……。10kmも走っていないんですよ。ボクサーは足腰が丈夫じゃなきゃ駄目なんですけどねえ。

—— ランニングが基本なのですね。

僕らのころは15ラウンド戦だったでしょう。今は12ラウンド戦だけど。だから普段の練習は20ラウンドを想定してやっていたんですよ。オリンピックや大きな大会を前にすると、どの競技でも本番の倍は走るような感じになるでしょう。僕らもそう。それだけ多く走る。基本はスタミナ。練習しなきゃ駄目。

## 自分に負けるな

—— プロとしての極意ということで、何か培ってきたものがあったら教えてください。

何て言うのかな、プロというのは夢を与える存在。だからアマチュアに負けてはいけない。

—— アマチュアボクシング界にも強い選手は大勢いましたね。最近だと、2012年のロンドンオリンピックで村田諒太選手がミドル級で金メダル

(のちにプロに転向)、清水聡選手がバンタム級で銅メダルを獲得するなど、勢いも感じます。今はアマチュアが優秀ですからしょうがないところもあります。でも僕はもちろん、「アマチュアなんかには絶対に負けたくない」という気持ちで、根性を持ってやってきました。

—— 「根性」という言葉、原田さんは大事にしていらっしゃるそうですね。

はい。「根性」というのは、例えば僕のように“ボクシング”という1つのことに打ち込んで何かを成し遂げた人だけが使うことができる1つの「勳章」だと思っています。

—— 将来を担う若手ボクサーたちに、これだけは言っておきたいということはありませんか?

やっぱり「自分に負けたら駄目」ということでしょうね。

—— なるほど。では最後に、「スポーツがくれた“宝物”」という何がありますか?

ボクシングでは、試合でどんなに殴り合っても最終ラウンドのゴングが鳴ると、お互いにポンポンと健闘を称え合うでしょう。あれはボクシングならではのもの。あの瞬間の「ご苦労さん」という感じに、なんともいえない“美学”がある。ボクシングは本当に素晴らしいスポーツだと思います。

—— どうもありがとうございました。



現役時代は走り込みを欠かさなかった



- 1921**  
大正10  
渡辺勇治郎氏、現在の目黒区下目黒1-86にボクシングジム日本拳闘倶楽部を設立し、拳闘指導を始める
- 1924**  
大正13  
明治大学が日本初の拳闘部創設  
日本拳闘倶楽部に次ぐ日本2番目のジム、東京拳闘会設立
- 1925**  
大正14  
第1回全国学生拳闘選手権大会が靖国神社相撲場にて開催
- 1926**  
大正15  
全日本アマチュア拳闘連盟創立総会、全国学生拳闘連盟創立総会が、神田駿河台のカフェ「ブラジル」にて同時に行われる  
第1回全日本アマチュア拳闘選手権大会、靖国神社相撲場にて開催。  
2日間で、4000～5000人もの観衆が集まる
- 1927**  
昭和2  
拳闘連盟が大日本体育協会に加盟
- 1928**  
昭和3  
初の全日本学生拳闘選手権大会、靖国神社相撲場にて開催
- 1930**  
昭和5  
第9回極東選手権大会(アジア大会前身)、日本青年館他にて開催。参加国は日本とフィリピンで、2日目にフィリピンが判定に抗議し、3試合を放棄し引き揚げてしまう  
連盟総会が、神田駿河台のカフェ「ブラジル」にて行われ、極東選手権大会の運営の不利に批判の理事らが連盟脱退  
新団体、全日本アマチュア拳闘協会設立総会が、日本青年館にて行われる  
連盟と協会、それぞれ全日本全選手権大会開催
- 1931**  
昭和6  
協会の始まりといわれる、全日本プロフェッショナル拳闘協会が組織
- 1932**  
昭和7  
連盟統一により、ロサンゼルスオリンピック参加を認められる  
大会中の国際アマチュアボクシング連盟(AIBA)総会で、日本の加盟承認
- 1934**  
昭和9  
全日本プロフェッショナル拳闘協会から全日本拳闘連盟に改称
- 1941**  
昭和16  
国粋主義の影響を受け、連盟は理事会で名称中の「アマチュア」を削除  
全日本拳闘連盟が、全日本拳闘競技連盟と改称(競技用語等も英語から日本語に変更)

**1943** ファイティング原田氏、東京都に生まれる

**1945** 第二次世界大戦が終戦

- 1946**  
昭和21  
日本アマチュア拳闘連盟が中央大学クラブで新たな設立総会開催。新規約審議が行われ、会長未定のまま再発足  
終戦後、日本ボクシング界はいち早く復興を果たし、28のクラブ(ジム)が集まって「日本拳闘協会」を発足
- 1947**  
昭和22  
毎日新聞が全日本大学高専対抗ボクシング選手権大会を後援  
日本大学、早稲田大学、関西大学、摂南大学が中央大学講堂で決戦。日本大学が優勝  
中学生(旧制)ボクシング選手権大会、中央大学講堂にて開催  
**1947** 日本国憲法が施行
- 1948**  
昭和23  
ロンドンオリンピック開催  
国際復帰できない日本は参加できず
- 1950**  
昭和25  
岸記念体育館での総会で、連盟は全日本アマチュア拳闘連盟から日本アマチュアボクシング連盟と改称  
この年からランキング発表  
**1950** 朝鮮戦争が勃発  
**1951** 安全保障条約を締結
- 1952**  
昭和27  
ヘルシンキオリンピック開催  
日本は16年ぶりのオリンピック参加となる
- 1954**  
昭和29  
第2回アジア競技大会、マニラ(フィリピン)にて開催。日本は、金メダル1個、銀メダル1個、銅メダル3個獲得  
**1955** 日本の高度経済成長の開始
- 1958**  
昭和33  
第3回アジア競技大会、後樂園アイスパレスにて開催。日本は、金メダル6個、銀メダル2個、銅メダル2個獲得
- 1960**  
昭和35  
ローマオリンピック開催  
日本は、フライ級の田辺清氏が、銅メダル獲得  
**1960** ファイティング原田氏、16歳10ヶ月でプロデビュー
- 1962**  
昭和37  
JBC設立にともない解散した協会が、10年ぶりに日本ボクシング協会の名称のもとに合同化される  
**1962** ファイティング原田氏、世界フライ級王座に初挑戦。当時の世界フライ級王者、ポーン・キングピッチ(タイ)を破り、19歳6ヶ月で史上最年少の世界フライ級王者となる
- 1963**  
昭和38  
東京オリンピックのリハーサルとして、東京国際スポーツ大会が、後樂園アイスパレスにて開催  
日本は、金メダル4個獲得

1964  
昭和39

第1回アジア選手権大会、バンコク(タイ)にて開催  
日本は、ライト級、ウェルター級、ライトミドル級にて、  
金メダル獲得

**1963** ファイティング原田氏、ボーン・キングピッチ  
(タイ)との再戦に判定で破れ王座陥落  
バンタム級に転向

東京オリンピック開催  
ボクシングは、後樂園アイスパレスにて開催  
バンタム級の桜井孝雄氏が、金メダル獲得

**1964** 東海道新幹線が開業

**1965** ファイティング原田氏、世界バンタム級王者  
となり、日本史上初の2階級制覇を達成  
ファイティング原田氏、初防衛戦に勝利

1966  
昭和41

第5回アジア競技大会、バンコク(タイ)にて開催  
ミドル級の佐藤誠一氏が、金メダル獲得

**1966** ファイティング原田氏、  
2度目の防衛戦に勝利

1967  
昭和42

第3回アジア選手権大会開催  
ライトミドル級の佐藤誠一氏が、金メダル獲得

**1967** ファイティング原田氏、  
3度目、4度目の防衛戦に勝利

1968  
昭和43

メキシコオリンピック開催  
バンタム級の森岡栄治氏が、銅メダル獲得

**1968** ファイティング原田氏、5度目の防衛戦に  
挑むが、当時19歳の無名挑戦者、  
ライオネル・ローズ(豪)に判定で敗れ、  
王座陥落

**1969** ファイティング原田氏、WBC世界フェザー級  
王者、ジョニー・ファメション(豪)に挑戦  
王者から3度のダウンを奪い、  
圧倒的有利かと思えたが、判定負けとなる

**1969** アポロ11号が人類初の月面有人着陸

**1970** ファイティング原田氏、引退

1971  
昭和46

文部省が連盟の社団法人化を認可  
基金300万円は、役員及び各都道府県連盟が拠出

1972  
昭和47

モハメド・アリ(米)の来日イベントに関する  
興行問題や金銭問題などが端緒となって、  
協会は二分裂する。協会を脱退したグループが  
第2団体として全日本ボクシング協会を組織

**1973** オイルショックが始まる

1975  
昭和50

第7回アジア選手権大会、  
横浜文化体育館にて開催  
日本は、金メダル6個獲得

**1976** ロッキード事件が表面化

**1978** 日中平和友好条約を調印

**1980** ファイティング原田氏、全日本ボクシング協会  
理事、新人王運営委員会委員長に就任

**1982** 東北、上越新幹線が開業

**1989** ファイティング原田氏、  
全日本ボクシング協会会長に就任

**1990** ファイティング原田氏、日本人として始めて  
米国ボクシング殿堂入りを果たす

**1991** ファイティング原田氏、米国カリフォルニア州、  
カルバーシティー名誉市民栄誉賞受賞  
ファイティング原田氏、アジア平和賞受賞

**1995** 阪神・淡路大震災が発生

**1997** 香港が中国に返還される

2000  
平成12

全日本ボクシング協会は、  
日本プロボクシング協会(JPBA)に改称

2001  
平成13

第3回東アジア大会、  
インテックス大阪にて開催。日本は、金メダル2個、  
銀メダル1個、銅メダル2個獲得

2003  
平成15

第1回女子アマチュアボクシング大会、  
日野健保プラザにて開催

**2007** 日本プロボクシング協会会長選挙に  
輪島功一氏、東日本協会会長選挙に  
具志堅用高氏が出馬表明したが、結果的に  
取り止めとなり、ファイティング原田氏、  
大橋秀行氏が無投票当選

**2008** リーマンショックが起こる

**2010** ファイティング原田氏、日本プロボクシング  
協会会長を退任し、終身名誉会長に就任  
ファイティング原田氏、この年に発足された  
プロボクシング・世界チャンピオン会の  
最高顧問に就任

**2011** 東日本大震災が発生

2012  
平成24

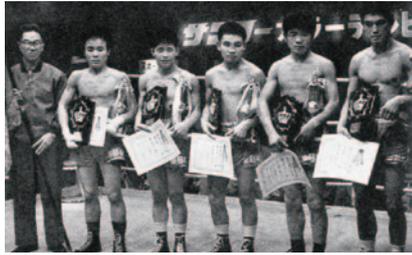
ロンドンオリンピック開催  
ミドル級の村田諒太氏が、金メダルを獲得  
バンタム級の清水聡氏が、銅メダルを獲得

2014  
平成26

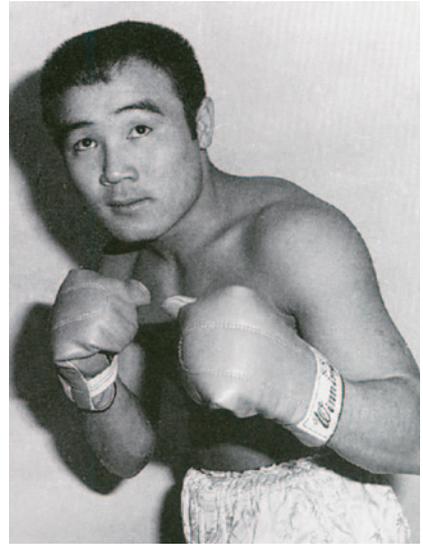
第17回アジア競技大会、仁川(韓国)にて開催  
日本は、銅メダル3個獲得



植木職人だった父(左上)、兄弟達と  
(前列中央がファイティング原田)



1960年 東日本新人王トーナメントを勝ち抜く  
ファイティング原田(左から2人目)



ファイティング原田



米俵を担いで身体が鍛えられた



水対策はボクサーの使命



ジムでは語り草となっているハードワークを連日こなした



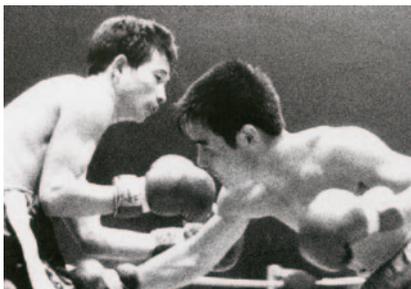
ロードワークが日課



1962年 19歳で世界チャンピオンとなったボーン・キング  
ピッチ戦ロープに追い詰める



エデル・ジョフレをロープに追い詰めるファイティング原田



1960年 東日本新人王決勝で海老原博幸と対戦し  
ライバルを下す



1963年 ボーン・キングピッチとのリターンマッチ戦に  
敗れバンタム級に転向



新チャンピオン誕生の瞬間



1965年 挑戦者アラン・ラドキンを退け初防衛



夫人、二人の息子と



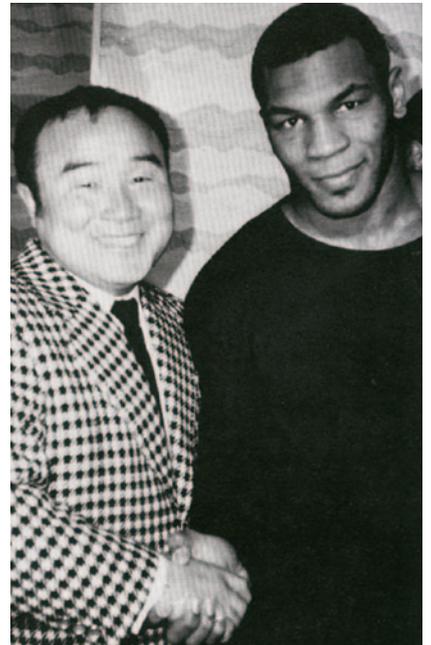
モハメド・アリ(左)、シュガー・レイ・レナード(右)等と  
左から2人目がファイティング原田



1970年 一度敗れたジョニー・ファメジョンとの再戦でも  
敗れこれがラストファイトとなった



ジムの会長として第2の人生をスタート  
左はフェザー級のタッド岡本



ヘビー級王者のマイク・タイソンと握手



1970年 引退式で挨拶するファイティング原田  
10カウントのゴングに送られリングを去った



協会長としての最初の仕事はチャンピオン委員会の設立  
歴代チャンピオンと



現役時代は走り込みを欠かさなかった



ファイティング原田